

『W.アーヴィングの2つの作品と 当世風社会史からみた18世紀末ニ ューヨークの社会的変化』

— 研 究 ノ ー ト —

茨 木 慶 三

はじめに

表題に入る前に、まず、当世風社会史についていろいろ指摘したい。というのは、いわゆる新（＝当世風）社会史の興隆は、過去20年間にわたる合衆国史学研究におけるもっとも劇的な発展であったと考えられるからである。もちろん、史家が歴史とは何ぞやを定義する点でのこの劇的変化は、狭い従来のアカデミックな観点では否定的に評価されよう。すなわちそれは、専門史家には一部目新しいがゆえばかりでなく、また多くの社会史家が他の史家のみならず、広い範囲の社会学者を感銘させようと試みてきたために、とくに縁遠いものとみえよう。しかしこの分野は、アカデミイの限界を越えた意義を有する。なぜなら、1つは、新社会史の勃興は、合衆国の史学不振への最近の嘆きに逆うものであり、さらに、新社会史は、歴史への大衆の注目に対して著しい含蓄を有するからである。すなわち、新社会史と広い聴衆との潜在的相互作用が深い刺激となっているからである。

何より、新社会史は新しい分野での過去に民衆をして関心をもたせる。多くの新社会史家は、自己の専門性は過去への新しい洞察のみならず、過去が現在をどのように作り上げてきたかに関する新しくダイナミックな舞台を提供すると主張する。確かにこの主張はユニークなものではなく、史学であるかぎりそれはこの種の理解に役立つであろう。しかし、いくらかの人々としては、新社会史は、他種類の歴史より生活素材により近づくことができ、当代社会が継続し、あくいは過去の傾向と対照するとき、そのパターンの、そして時としては個人的価値観の理解により直接役立つのである。そこで筆者は、第1章で、ステアームス（Peter N. Stearns）の論述⁽¹⁾に基づきながらこの新社会史についていささかスポットをあててみよう。

次に筆者は、ウェルズ（Robert V. wells）の論究⁽²⁾に依拠しつつ、ニューヨーク生まれの

『W.アーヴィングの2つの作品と当世風社会史からみた18世紀末ニューヨークの社会的変化』

著名な作家アーヴィング（Washington Irving, 1783-1859）の2つの作品とこの新社会史における分析を対比してみたい。というのは彼は、有名な2つの物語「リップ・ヴァン・ウインクル」(“Rip Van Winkle”)と「スリーピー・ホローの伝説」(“The legend of Sleepy Hollow”⁽³⁾)を書いたが、この2作品の内容を設定する点での彼は、現代史家、とくに新社会史家の関心の中心となるような多くの論点を示唆していると思われるからである。例えば、18世紀末から19世紀初期に個々のニューヨーク人の生活や、家族・社会・国家に関して起こった変化に史家は誰しも関心をもつが、アーヴィングがこれらの物語で示唆した点は、最近当世風社会史家が“リップがまどろんでいた20年間”について発見した事と類似しているように思われる。そこで筆者は、第2章で、アーヴィングの示唆した点と新社会史家の発見とを比較してみようとするわけである。

第1章 当世風社会史について

新社会史は一連のトピックとして、また、歴史への一接近法として考究されねばならないが、それは、因習的史学が大部分無視した2つの広い課題を含む。すなわち、第1に、それはエリートよりも民衆を取り扱う。「底辺からみた歴史」⁽¹⁾は、今日なお有効なスローガンである。従来ニグレクトされた労働階級、黒人、民族集団、婦人等々が対象となる。第2に、それは日常の活動・文物・思考様式の歴史である。各世代の生活・余暇・男女の姿勢・社会流動・家族・死とか健康とか医薬に関連する態度や習慣・犯罪・心のありよう⁽²⁾等々民衆の日常生活全般が対象となる。

ところで、こうした新社会史家の新しく広い課題の追求こそが、史学への興奮の原因であったが、民衆を強調することは、しばしばアメリカ社会における政治的变化と密接に関係があった。民衆の生活諸側面への関心は、明白にそれほど政治的ではないけれども、今日の犯罪問題や家族の安定への関心増大に由来するのである。政治が過去での重要性の始めであり、終わりだと確信した旧来の史家は、この新しい広い課題の有効性にたまげた。新社会史は政治・経済・文化の歴史といった部門を含むばかりか、過去への特殊なアプローチであり、史的記録での先入観を変転させる。新社会史家は、政治的行為は必ずしもデモグラフィックな姿勢における変化より重要とは限らない。大思想の物語は、しばしば民衆が子供を取り扱う方法における変化に譲歩しなければならないと主張する。

さて、新社会史家はまた、その特殊な関心の結果として、時間への独自の接近をはかる。さらに彼らは、圧倒的に変化に関心をもち、それゆえ年代的に分かりやすくしようとするが、一方通常、相対的に長い持続期間の観点で議論する。

次に新社会史家は、旧来の(=因習的)史家に比べて結末に心地よくなく、代わってプロセス、当該期間内の独特の傾向を取り扱う。すなわち彼らは、戦争とか流行病が民衆生活に持続的に変化を惹起させるとは推定しない。彼らはもちろん、黒死病や世界大戦が死

『W.アーヴィングの2つの作品と当世風社会史からみた18世紀末ニューヨークの社会的変化』

亡率や婦人の職業パターンへインパクトを与えるといったことは認めるけれども、その結末の探求ではなく、むしろ、アイルランド移民が合衆国の流動性という原則⁽³⁾へ適応させられた側面というようなプロセスの解明という視点をより重視するのである。

くわえて新社会史家は、政治、軍事的発展、胚子状態の思想が農民の姿勢、育児習慣、娯楽パターンと融合してその時代の全社会像に統合されたところの「全体史」⁽⁴⁾を、観念の上で生み出すことを目指すのだと主張する⁽⁵⁾。

ところで新社会史は、なぜ「新」と修飾されるのであろうか?! その対象とするものは、従来から研究されてきた。だがしかし、「新」というラベルは、この対象分野の明確化に好都合であると思われる。そのアプローチの仕方や課題が目新しいから、新社会史は「新」であるとの主張はともかく、次の諸点に注意する必要があるだろう。

「新」という語は、とくにいわゆる計量史に対する誤った認定の場合のようにいくらかの混乱を発生させる恐れがある。新社会史は非常に計量的資料に依存する点があるが、だからといって、計量的方法と混乱してはならない。新社会史家は、時には計量的証拠の正当性に疑問をもつ。なぜなら、例えば、情緒の歴史のような課題は意義ある計量的側面を有しないからである。このように、新社会史は計量史ではない。逆もまた然りである。ただし確かに、新社会史家は、計量的センスを必要とするけれども。

新社会史が新しく、かつ史学そのものとは違わないもっとも明白な点は、1920年以来ポピュラーなより古い社会史の基準から脱皮したことである。新社会史家は、その研究をいわゆる「鍋釜史」と区別しようと苦勞している。例えば、ファッションや食器の変遷の図解は明白に社会史の一部である。しかし、より広い社会的意義への言及がなければ、真の社会史とはいえない。

実際、「新」という語の使用は、主として、社会史が、学校で教えられる種類の歴史とは如何に違うかを示すのに役立つ。新社会史家は、新しい課題を押し出し、自己の計量化への依存やいくらかの物質文化への新しい関心といった点で、自己の強調点を転換した。とはいえもちろん、彼らの基本的アプローチや自己定義は全然新しくないのである。事実注目すべき点は、その目新しさではなく、着実な進ちょくである。従来の社会史に比較して新社会史が新しくみえるのは、それを一時的流行とみなすからかも知れない。それは、永久に隆盛すると断言できないが、少くも次の世代はそれを推進し続けるであろう。従ってわれわれは、新社会史に新しい意義をもたらしたことのみならず、それを支持し続けるものを探索しなければなるまい。

それはとにかく、3つの要因が1960年代での新社会史の前進に、従ってそれが創出した目新しいという印象に貢献したと思われる。

第1は、イギリス・フランスでのいわゆる“アナール派”の影響であり、第2は、社会科学のそれである。すなわち新社会史は、自己の仕事と社会科学のそれとの間のギャップ

『W.アーヴィングの2つの作品と当世風社会史からみた18世紀末ニューヨークの社会的変化』を橋渡ししようとするごく最近の歴史家の努力を意味した。なおこの点と相応して、社会科学の影響はアメリカの新社会史がイギリス・フランスのそれと峻別される点である。次に第3は、政治的風土である。アメリカの新社会史は、明白な政治領域外にある当時のアメリカ人の生活の主要な様相への関心に刺激されてきた。他方アメリカ人の著作は、他の側面で社会史にインパクトを与えた。ただし、いくらかのヨーロッパの主導権へのかかわり合いの意義は残存する。また、新社会史の左翼的傾向が政治風土の変化にいささか譲歩するとき、その当世問題のかかわり合いは残存せざるをえない。

さらに、他の諸要因が新社会史に関して進展する興奮を醸成した。すなわち、分析されるべき新しいグループと史的評価を受けるべき人間の経験の新しい側面という観点からみられる、間断のない新しい課題の流れを生み出す能力が、社会史の領域のダイナミズムを目立たせた。しかも学究的前進とは別に、新しい課題と、社会史の社会姿勢や外観の第2世代の探求への拡大が、社会の諸側面を過去の見とおしへと切り開くという点で、この分野のより広い公開への約束を保障するのである。

くわえて、トピックの拡大に関連して、「無告の人々」や私的活動が文字どおり雄弁に物語るように、資料の急増がある。センサス資料 警察の記録、遺言、従来ニグレクトされた労働者の伝記、予期されなかった中流婦人の日誌、こういった記録のみならず、より従来の資料の再活用によって、社会史的興味の範囲が保障される。つまり、過去の犯罪率から19世紀末におけるスポーツの興隆からえられた内的詳細に至るまでの重要な問題が、なお不十分にしか解答されていない。しかし、これらのほとんどの何ものが、少なくとも従来のやり方では史実に基づいてアプローチされえないのである。

こうして、話題や資料の拡大につれて、そのいくらかは既成の知識を大いに修正することになったが、諸発見が新社会史での興奮を醸成した。ところで、新課題は次のようなものであった。

まず、精神病医学者や心理史家にとって、子供の両親の性交目撃は外傷性の経験であると主張するのは、月並みなことだとみなされてきた。社会史家は、その経験の性格や現代社会でのその頻度を変えるかも知れない新しい住宅設備を含む、プライバシーという新しい理念の探索に想像力豊かに努力してきた。しかも今や精神病医学者は、偶然の幼児の観淫症における生まれつきの外傷性神経症という主張をやめてしまった。

次に、現代化に伴う大家族から核家族への明白な転換についての通常的印象は不正確である。また、現代の家族崩壊という暗い影の出現以前のより古い家族メンバーへの暖かい扶養の環境といった観念のような関連した信念も不正確である。思うにこの課題については、社会学学者や老年学学者の研究はややスローである。だが探求が進むにつれて、史的描写が修正されるばかりでなく、現代生活におけるいくらかの基本的傾向に関するわれ

『W.アーヴィングの2つの作品と当世風社会史からみた18世紀末ニューヨークの社会的変化』

われの理解も変化するであろう。

第3に、犯罪が都市化とともに必ずしも絶えず増加しない。都市条件の特殊性は犯罪を惹起するが、都市自体が犯罪を引き起こすものではない。多くの農村地域の犯罪発生率も高い。犯罪発生率の最善の予言者は、都市化ではなくて過去のそれ、青年数の率などである。現代の犯罪問題の少くとも一部は、道徳的知覚と実際の犯罪との間の変化の程度の相違から生ずるものであろう。

第4に、現代史での根本的性革命は、18世紀末に始まった。われわれの性的標準に関するより新しい変化の理解は、最初の変動の把握によって高められるであろう。

第5に、合衆国における移動のパターンは、修辭的示唆よりもその印象はかなり小である。史的のみならず現代のアメリカの経済について、より以上の理解をえるには、修辭と現実のギャップに照した解釈を必要とするであろう。

くわえて、他の諸課題が存在する。例えば、19世紀末ころからの合衆国での男性の主体性における危機というような興味深い問題がある。また、産業化の一部として因習的な余暇形式への攻撃や、現代の余暇の性格に対する結果的インパクトを評価する問題がある。これらの領域の大底において、社会史家は歴史のトピックと資料の拡大だけでなく、概括化のわく組み、つまり一種の傾向を提供する。ついでこのわく組みは、過去の解釈を潤色し、例えば、アメリカ史における基本的舞台ないし時期の説述に深さをくわえる一方、現代の風潮を活力に満ちた文脈で表現することを可能にする。

なかならず、社会史の持続する活力は、なぜわれわれの生活や社会が現在の様式であるかのいくらかの意義の解明の手がかりをえることにかかっている。例えば、勤労体験史の理解は、人々が今日やっている職業選択の性格やそれらの選択への独特な制約を把握するのに役立つ。また、われわれがノーマルとみなす家族感情が、実際むしろ、最近の異常な史的人工加工物であることへの理解は、われわれの情緒上の可能性が発生させる諸問題によりよく取り組むのに役立つかも知れないし、役立たないかも知れない。しかし、それは少くとも、われわれがそれらの問題を考えざるをえなくする。こうして、現代初期に適切に社会史を育成した様々な当世の関心は、人間と社会が機能する様式へのくりかえされた洞察のために社会史へ依存することへと広げられた。

とはいえ反面、社会史の興隆はいくらかの問題——いくらかは固有のもの、いくらかは重大だが訂正できるもの——をもち込む。

社会史は、より因習的な様式に慣れたいくらかの人々には、混乱させるものだと思われることは確かである。すなわち例えば、特定の日付や伝記的焦点の軽視は、いくらかの周知の画期的的事件を歴史から削除してしまうというわけである。また、「何時眞の歴史に到達するのか？」というのも、非常に精妙となった当世風社会史への異常な反応とはいえない。さらに、社会史家のプロセスへの関心も、旧来の社会史に習熟した人々との緊張を結

果する。当世風社会史は、人が簡単により因習的な歴史から離れてすべり込むことのできるアプローチではなく、それは、いくらかの再工夫を必要とするであろう。

ところで、社会史家は、最近まで宣伝に特別の注意を払わなかった。しかし、社会史による発見がアカデミックな限界を超えて生み出した情熱に助けられて、社会史の研究対象やアプローチへ関心が深化した。こうして、宣伝普及の可能性が生まれた。

だが、大底の古風な社会史には2つの欠点があり、それが問題を込み入らせる。すなわち、大底の旧来の社会史家は、社会史の話題とより因習的な歴史のそれとの相関関係への明確な考慮を回避してきた。例えば、社会史家は、従来の史家がニグレクトした独立革命での下層民衆の役割を取り扱い、また、家族関係での変化の間のリンク——親子間のテンションとか、育児スタイルとか、革命へ参加する意志とか——⁽⁶⁾について少しではあるが概括化を試みた。しかし、新しいことにせよ、月並みのことにせよ、各部分をひとまとめにした全体として独立革命の社会史的解釈は、現在までなされていない。また社会史家は、その研究を外交・軍事史と結びつけることを躊躇している。これらの怠慢は、概念上での欠陥となろう。さらに社会史家は、あるべきよりも社会史を使用しにくくしている。教科書で社会史がニグレクトされているのは、その徴候といえよう。

もっと悪いことには、社会史は、時として自分自身の特殊な課題にさえも合致させることを怠った。いくらかの観察者にとっては、社会史は1分野ないし、1アプローチというよりは、むしろ、目新しさによってのみ結合された別々の課題の集合とみえる。社会史は、これらの遠心的な分離新設（スピン＝オフ）からいまだに免れていないというわけである。このゆえに、アメリカ社会史の単一の教科書は、いままで製作されなかったのである。⁽⁷⁾

上記の2欠点は、改善されるとは断言できないが、改良可能なことである。多くの社会史家は、文裂を制約して全体統合史を旨ざそうとの意識をもっているし、有力な下位領域のいくらかにおける多くの仕事は、雑交受精を促進しようとしている。すなわち、社会グループと政治姿勢を関連させ、政策の社会的インパクトを取り扱おうとする努力はこのような試みの適例である。そして実際、研究者とより広い民衆との間の相互作用は、互いに有益であろう。

なるほど、社会史家の潜在的利用者が、社会史に関するいくらかの眞の再方向づけなしに、新しい事実に資料の精通を超えてこの分野に移行することは期待できない。彼らは、事件や加工物の代わりにプロセスへの注意を必要とする。また彼らは、鍋釜的アプローチの主成分として役立つところの、事をなす過去のやり方と現代のそれとの間の劇的な相違への専念とは著しく違って、過去と現在とを社会史が結びつける方法を知らねばならない。

さらに彼らは、歴史における月並みの先入観の再方向づけに自身を解放することが必要であろう。つまり、一見些細な生活領域における変化が、表面上より顕著な画期的事件とともに意味をもつのである。例えば、その後の社会形成上、南北戦争後の再建期の政策が

『W.アーヴィングの2つの作品と当世風社会史からみた18世紀末ニューヨークの社会的変化』
未曾有の低い生誕率への転換よりもより重要であると断言できはしないのである。

第2章 18世紀末ニューヨークの社会的変化

——当世風社会史の成果とW・アーヴィングの作品——

話変わって、アーヴィングの作品によれば、リップの経歴は次のようなものであった。彼は、キャツキル山脈のふもとのハドソン西岸に17世紀にオランダ人が創設した古い小村に住んでいた。物語はほぼ1773ないし74年から始まるが、彼が山へ行ったのは大体30才ぐらいであったと思われる。彼は、彼が家庭生活や農耕に配慮しないというので常に小言をいう妻と上手くいっていなかった。実際彼は、隣人を助けたり、友人と酒場の前庭で坐ったり、ときどき、犬と鉄砲をもって山にこもって狩りをしたりするばかりであった。

ある時彼は、古いオランダ風の服装の小人に誘われ、山へ行って遊び、酒に酔ってまどろんでしまい、目覚めたところその小人は姿を消していた。やむなく彼が帰宅したところ知らぬ間に20年が経過して、世の中はすっかり変わっており、彼の家族も、タウンも、国家さえ著しく変化していた。彼の家は既に崩壊し、妻は死亡し、息子は怠惰の生活を送っていた。しかし娘は、繁栄した農夫と結婚して孫をもうけており、リップの息子とリップ自身を自家に引き取った。

同様にタウンも変化していた。誰もが顔見知りのぼんやりした村ではなく、新しい家屋、昔と違う服装をした人々が住む村であった。住民の性格も変わり、とりすましてまどろんだ平靜さに代わって、忙しく、にぎにぎしい調子があった。ただし、老人を尊敬する伝統は残存していた。リップは、イギリス国王に忠誠な臣民でなく、合衆国の自由な公民であり、彼自身、独立革命の結果獲得した自由慣れに慣れていた。

ところで、以上のアーヴィングの説明は事実にあっているであろうか？ まず、リップ家を見てみよう。リップ家が18世紀末の平均的な家族と相違したいくらかの点が存する。リップ夫妻は、当時の夫婦のもうけた子供数（6）に比べて、1人の息子と1人の娘しかもたなかった⁽¹⁾。また、子供の側からみてもリップ家はノーマルではない。なぜなら、ある研究では、3人以下の子供しかいない家族に所属する子供はすべての子供の2.6%にしかすぎず、他の研究では、中部植民地のクェーカーの子供の60%は少くも7人の兄弟姉妹を有していたからである⁽²⁾。中部植民地のクェーカーの母親たちの場合、1776年以前に結婚したものは約6.6人の子供を有したが、1776年から1830年の間に結婚したものは平均4.6人の子供しか生まなかった⁽³⁾。つまり、いくらかのカップルは、独立革命のころ意識して出産制限を始めたのである。

次に世帯員の観点に立つと、リップのまどろみは、初期アメリカの通常の場合に比べて興味ある3点を結果した。第1に、彼が山へ行ったとき、若いリップ夫妻の世帯員は4人

『W.アーヴィングの2つの作品と当世風社会史からみた18世紀末ニューヨークの社会的変化』
にすぎず、従って、18世紀のアメリカの世帯員数の平均6人より2人少なかった⁽⁴⁾。そもそも、30才から54才までの父親が筆頭者である世帯の77%が5人の世帯員を有し、筆頭者が40才から44才のとき世帯員数はピーク（最少で7人）が通常であった⁽⁵⁾。第2に、リップ家は、彼のまどろみのため妻を長とする3人家族であり、しかも女性が世帯の責任者であった点は異常である。センサスによれば、女性を家長とする世帯の割合は、18世紀を通じてゆっくりと増加するけれども、何らかの意義をもつ程度に女性が世帯責任者となるのは1950年以後のことなのである⁽⁶⁾。第3に、リップが帰宅したとき、娘夫婦の世帯は5人となり3世代家族となったが、これは、最近の研究結果による核家族の主張よりも、植民地時代には大家族であるという伝統的なイメージに一致する。この点からみると、ロード・アイランドのセンサスが、1774年には全世帯の1.4%だけが独身者世帯で、1790年には3.7%だけがそうであったと示している史実に一致する⁽⁷⁾。

ところで、リップの長期の不在が妻に惹き起こした問題はどうかであったろうか？ ノートン（Mary Beth Norton）女史は、独立革命が婦人の社会的地位を如何に変えたかを論述したが、彼女によれば、若い女性が直面したもっとも重要な決心は夫の選択であった⁽⁸⁾。1800年以前には、結婚以外に女性のチャンスはまれであり、法律や世間は男性優位を当然のこととしたから、婦人はその生活を男性に依存した⁽⁹⁾。リップ夫人は、夫が駄目男であったから通常以上に深く家政にかかわらざるをえなかった。それはともかく、一般に女性は、独立革命期の間により広い家政および公的事がらにかかわるようになった⁽¹⁰⁾。なぜなら、夫が軍役や国政ないし邦政での職務のため不在であったからである。また、本国商品ボイコットと軍需のため婦人の助力が必要であり、女性が政務を論述することが奨励されたからである。リップ夫人の場合、当時の離婚は法的になかなか認められなかった⁽¹¹⁾ので、夫の長期の不在にもかかわらず離婚できなかった。もっとも、1779・80年の勤王派大地主の土地没収・売却法が農家に革命に参加することを勧誘するまでは、一般農家は革命戦争に無関心かつ介入をためらった⁽¹²⁾。しかしリップ夫人の場合、夫の留守中、夫の居るときより生活上独立的であったことは疑えない。

次に娘夫婦がリップ1・2世の欠陥にもかかわらず、リップ家の名を使って子供に命名したのは当時の基準に合っている。もちろん娘が、母親から伝授された家事処理術以上に自己を訓練し、新共和政政治の求めた高潔な公民となるために、当時の高まりつつある女性教育への関心⁽¹³⁾を活用したかどうかは不明である。しかし当時のこの関心昂揚は、彼女にその母親と異ならしめるための1つのチャンスであったことは確言できよう。

さらに、リップのまどろんでいる間に変化したのは家庭生活だけではなかった。タウンの性格も、変わってしまった。しかも、リップの経験が、その不在の理由が如何に特殊であるにせよ、異常ではないことを示唆する史実が存在する。

作者が、リップが居住したとするタウンに匹敵する現実に存在した村の資料は入手でき

『W.アーヴィングの2つの作品と当世風社会史からみた18世紀末ニューヨークの社会的変化』
ないが、前者より下流のニューロチェル（1689年にフランス新教徒が創立）の1771年のセンサス資料のコピーがニューヨーク史学協会に保存されているノートブックに残されている。また、同タウンの1767年の課税表も入手できるし、さらに、1790年の最初の合衆国センサス⁽¹⁴⁾に同タウンの世帯に関する資料が記載されている。従ってわれわれは、リップの出發時および帰村時とほとんど同じころの寸描をもつわけである。そのうえ、1710年12月に作成された同タウンの住民表は、長期間のみとおしを可能にするであろう⁽¹⁵⁾。

ニューロチェルの人口は、1710年に264人、1771年までに714人に増加したが、1790年までに690人とやや減少した。これは、他のハドソン河岸オランダ人タウンに比べて、ゆっくりした人口成長である⁽¹⁶⁾。

しかし同タウンは、黒人奴隷数では通常のオランダ人タウンと相違する。同タウンの黒人奴隷は、1710年に全人口の21.6%、1771年に21.8%であったが、1790年までに12.6%（うち4%は自由黒人）に減少した。また、1771年に同タウンの世帯の51%は白・黒人双方を含んだが、1790年には、41.3%しか含まなかった。ともかく、黒人人口の変化はゆっくりであったのである。これに対して通常のオランダ人タウンの黒人奴隷人口は、1790年のそれは1731年のそれと同じかやや高率である。アーヴィングはこの作品では黒人に何もふれていないが、「スリーピィ・ホローの伝説」では、使者やバイオリン引きなどとして言及している。とはいえこのような描写は、黒人が、実際に18世紀ニューヨークで演じた役割より黒人の活動を過小評価したものといわねばならない⁽¹⁷⁾。西部の新しいウタンはともかく、古いタウンでは通常、かなりの黒人が活躍していたと思われる。

それはさておき、タウンの継続性と変化を分析する興味ある方法の一つは、1資料から他の資料へと姓名を追跡できる様々なリストを使用することである。ニューロチェルでは、1771年の100の筆頭者および1790年の109のそれから、29人の同一名字のものが確認できるが、それによれば、1771年の筆頭者の71人が1790年までに消え、80人の新筆頭者が登場する。ただし、ここから推測できる世帯の継続性は、過大評価のきらいがある。なぜなら、両年の同一姓名の人が全く同一人物が証明できないし、2・3の未亡人が旧来の家の名の存在を水増しする結果になっているかもしれないがゆえに、上記のリストからは正確に判断できないからである。

一方、1767年の課税表と1771年のセンサスの間の継続性には、意味深い否定的事実がある。すなわち、1767年に居住した104人のうち36人が1771年までに消失し、32人の新筆頭者が登場する。しかし、筆頭者の3分の2よりやや多数だけが4年間同一人とどまった事実は、否定できないのである。

とはいえ、古い既成家族のなかでは変化の率は異常であったかも知れない。例えば、シュルマン家（Schurmans）は1710年に2世帯、1767年に6世帯で、1771年にも6世帯であったが、この6世帯のうち1世帯の筆頭者だけが同一人であり、また、1790年までに同家

『W.アーヴィングの2つの作品と当世風社会史からみた18世紀末ニューヨークの社会的変化』

の3世帯のみが残存したのであった。

なお、綴について少し注釈したい。すなわち、同じ綴でなくても同音ならば同一家とみなした点である。例えば、1767・71年のSchurmansは1790年のSchuremansと同一家とした。また、1767年のJohn SuliceとJoshua Sullisは、1771年のJohn and Joshua Schillisと同一家と考えた。さらに税額表から推定して、1790年のJoshua Souliceも同一家とみなした。次にCornelとCornwallは、CORE-NULLの変形と思われる。くわえて、1767年のMcGradyは、71年までにMcGavers、90年までにMcEversとされ、また67年のBarhiteは、71年にBrightと呼ばれたと考えた次第である。

それはともかく、家族名をもっと検討すれば、各家が、基礎は同一にとどまりつつ、絶えず改変されたとするのが、18世紀末ニューヨーク社会生活を理解するのに有益であることが判明する。すなわちそれは、第1表によって示唆されるであろう。要するに、古い家系の支配力は1790年までに低下したが、なおそれは、ニューロチェルにとって継続性の強

第1表

1771・72年のニューロ
チェルの名字比較

	1771年	1790年
全名字数	100	109
異なった名字の数	62	75
世帯のユニークな名字の数	44	54

9つの旧家

名字の%	14.5	12.0
世帯の%	36.0	27.5
タウン人口の%	39.8	31.4

3つのもっとも多数の
親族グループ

名字の%	4.8	4.8
世帯の%	18.0	11.0
タウン人口の%	19.0	16.2

『W.アーヴィングの2つの作品と当世風社会史からみた18世紀末ニューヨークの社会的変化』

固な基盤であったのである。

以上のニューロチェルの分析から、次のようにいうことができよう。すなわち、タウンは大体の人口では急速な転換を経験したが、その実際の筆頭者が年々如何に変わったとしても、根本的な安定性を保障する小グループの家が存在したのである。

以下、建物、名前、顔見知りといった表面的なものではないタウンの変化にふれてみると、実際、商工業中心の世界が、因習的な農村のパターンにとって代わった19世紀に起こりつつあった事実の徴候が、1790年代に既に現われていたのである。そして変化のプロセスは、2つの重複するが相異なったパターンを含んでいた。すなわち、一方で、政治・経済・社会関係について新姿勢を具現する新しいタウンが、大西洋岸近くの開かれた場所と、小人数しか居住者のいない西部に、1790年初めに出現した。他方、より重要なことだが、新しいチャンスを求めて西方へ向う移住民が、より古いタウンの可能性の探索をとめ、また、古い住民がタウン境を超えて視野を高めるように誘引されたところのプロセスが存在したのである。

ところで、ニューヨークとニューイングランドとには多少の相違があった。すなわち後者の沿岸社会では、ハドソン河岸の古いオランダ人のタウンよりも、より早く、またより強く変化の風が感ぜられた。ただしこの相違が、政治革命の諸力と独立後の拡大してゆく商業上の機会がより強く作用したためなのか、また、ヨーカーとヤンキーの文化の固有の相違に由来するものなのかは不確かである。以下まず、後者の1、2の例⁽¹⁸⁾をみてみよう。

コンコードでは、革命前の生活は著しく偏狭・地方的であった。しかし、対英抵抗が深化するや、青年や外来者から成る新世代のリーダーは地方的ではなくなった。その典例は、1790年代初期における、商業活動拡張を目ざした公道改善計画の一部としての局地リーダーによる特権打破である。なおその他、新なめし皮工場、時計工場、郵便局、消防隊、様々な自発的団体の設立がみられた⁽¹⁹⁾。

次に、ニューヴァリィポートでは、商人社会が影響された。1775年の革命と88年の合衆国憲法を支持した商人は、1790年以後の商業上の競争に対処するには年老いまた資金も不足だと考え、いくらかは引退し、いくらかは西部の新タウンへ移動した。ために彼らは、アーチザンとして出発し、彼らより資金を蓄積した人々にとって代わられた。親英か親仏か、フェデラルかデモクラットかの論争によって、古い商人の調和は破壊され、商人同志が政敵となった。なおこの分裂前に、橋梁、運河、羊毛工場、銀行などが設立された。

これに対してハドソン河岸の小タウンでは、もう少し後になるまで同じ結末がみられなかった。そこでは、種々の政治的・社会的・経済的表明からみると、独立革命支持はより不承不承で、より漸進的であった。1790年代初め、オルバニィやキングストン（ニューヨークのタウン）は、古いオランダ風の特徴を失っていたが、コンコードや現在のユーティカ（ニューヨーク中部のタウン）近辺の新小タウンとは同様ではなかった⁽²⁰⁾。

『W.アーヴィングの2つの作品と当世風社会史からみた18世紀末ニューヨークの社会的変化』

すべてのアメリカ人が、独立革命中・後に起こった変化をチャンスとみなしたわけではない。既に筆者は、ニューヴァリイポートを分裂させたきびしい政治的あつれきを示唆した。セーレムの商人に関する著作でファーバー (Bernard Farber) は、多くの人々は不承不承、家族的結びつきに基づく商業上の慣行を放棄したと結論した。また、1800年以後のニューヨークの第2次大覚醒は、新・旧生活スタイル間の緊張に対する一連のユトピア的・宗教的対応の一部であった。

話変わってアーヴィングは、「スリーピィ・ホローの伝説」で小さな片田舎のオランダ人のタウンについて書き、住民・マナー・慣習が固定して残存し、大切にされていたことを指摘する反面、せかせかした当該地域の他の部分で、不断の変化をもたらした移住・開拓の大きな流れが知らぬ間に荒れまわっていることを示した。⁽²⁾すなわち、スリーピィ・ホロー自体は、ものうげなおちつきとまどろんだ夢のような感応をもった、全世界中のもっとも静かな場所の1つであった。しかし内部では、大変栄えた農地を所有する父と個人的魅力をもつ若き乙女を獲得するための、地元青年と新思想をこのタウンにもち込んだヤンキーの学校教師との争いがみられた。アーヴィングは、オランダ人のタウンの生活の性質をからかうけれども、実は嘲笑的となるのはヤンキー教師であった。つまり、次のような次第である。地元青年は居残って乙女の父の大財産を増やそうと意図する。これに対してヤンキー教師は、この財産を売り、その金を大きな未開地に投資し、その未開地で妻とする上述の乙女とともにこけら板を張った豪邸で暮さうとする。後者は目を都会化された辺境に移し、法律家なり、ジャーナリストなり、政治家なりとしての生涯に進もうとする。しかし、古いオランダ人の価値観に比べて、アメリカでの新生活の調子のシンボルは、如何にも馬鹿馬鹿しく、恐らく軽率であるというわけである。

おわりに

以上つづまるところ、以下の点が指摘できよう。第1に、社会史のより広い用法への調整は、関係者にとって自動的に可能であったり、たやすいことではない。しかし社会史家は、歴史学の沈滞ムードに反抗しなければならない。当世風社会史のより広い聴衆への拡大から期待される主要な利点の一つは、熱意のいくらかは伝染性があるということである。社会史への接触は、従来歴史を利用しなかったいくらかの人々を歴史学の称賛者とするであろう。また史的関心を既にもつ人々には、経験の改造として役立つ。すなわち、この新しいレンズ (= 当世風社会史) なしに過去をみたり、現代を把握したりできなくなるのである。そして、過去における基本的プロセスへの注目——それは新社会史の主構成要素であるが——は、現在におけるプロセス、新知識を創造し、吸収するプロセスとの眞のかかり合いに到達するであろう。

第2に、価値観の変化の問題である。リップがまどろんでいる間、つまり、ニューヨー

『W.アーヴィングの2つの作品と当世風社会史からみた18世紀末ニューヨークの社会的変化』
ク植民地で、とくに国家および州レベルでの変遷がわれわれの想像以上に広範囲であった
がゆえに、新生共合(=合衆国)内に「エンパイア・ステート」⁽¹⁾としてそれが登場し始
めたとき、その期間に何が起こったかを探求するためには、家庭やタウンを超えて考察す
るのが至当といえよう。もちろん、リップ自身はそのようなことに関心をもたない。彼は
いわゆるノンポリであり、州や国家の変化は、彼にほとんど何の痕跡も与えなかった。か
かあ天下=リップ夫人の暴政からの解放の方が、合衆国の自由な公民よりもリップを喜ば
せたのである。ここにおいて筆者は、リップがアメリカ史の重要な時期の間まどろんだと
き、何が起こったかのいくらかの見とおしある分析をアーヴィングが精妙にその著書でサ
ジェストしたと主張するだけで、満足しなければならない。

註

はじめに

- ① Peter N. Stearns, "The New Social History: An Overview", James B. Gardner and George Rollie Adams eds., *Ordinary People and Everyday Life Perspectives on the New Social History* (1983), 3-21.
- ② Robert V. Wells, "While Rip Napped: Social Change in Late 18th-Century New York", *New York History*, vol. 71 (January 1990), 5-23.
- ③ James W. Tuttleton, ed., *Washington Irving: History, Tales, and Sketches* (1983), 767-85, 1058-88.

第1章

- ① Jesse Lemisch, "The American Revolution Seen from the Bottom UP", *Towards a New Past: Dissenting Essays in American History* ed., by Barton J. Bernstein (1968), 3-45.
- ② James Henretta, "Social History as Lived and Written", *American Historical Review*, vol. 84 (1979), 1293-1333.
- ③ Cf. Stephan Thernstrom, *Poverty and Progress: Social Mobility in a 19th-century City* (1964).
- ④ Traian Stoianovich, *French Historical Method: The "Annales"*, Paracigm (1976).
- ⑤ Cf. John Demos, *A Little Commonwealth: Family Life in Plymouth County* (1971); Philip J. Greven, Jr., *Four Generations: Population, Land, and Family in Colonial Andover, Massachusetts* (1970); Kenneth A. Lockridge, *A New England Town: The First Hundred Years* (1970); Daniel J. Walkowitz, *Worker City, Company Town: Iron and Cotton Worker Protest in Troy and Cohoes, New York, 1855-1884* (1978); Anthony F. Wallace, *Rockdale: The Growth of an American Village in the Early Industrial Revolution* (1980).
- ⑥ Pauline Maier, *From Resistance to Revolution: Colonial Radicals and the Development of American Opposition to Britain: 1765-1766* (1972); Philip Greven, *The*

Protestant Temperament:Patterns of Child Rearing, Religious Experience, and the Self in Early America(1979).

- ⑦ Gary B.Nash,Class and Society in Early America(1970); do, Red, White, and Black:The Peoples of Early America(1974).

第2章

- ① Robert V.Wells, Revolutions in Americans'Lives(1982), 243.なお、いくつかの研究によれば、当時のカップルの約20%のみ、2人の子供しかもたなかった(Carl E. Jones,“A Genealogical Study of Population”,American Statistical Journal, vol. 16(1918-19),210).
- ② Frederik S.Crum,“The Decadence of the Native American Stock:A statistical study of Genealogical Records”, American Statistical Association, Journal vol. 14(1916-17),215-22;Robert V.Wells, “Familysize and Fertility Control in 18th-Century America:A study of Quaker Families”, Population Studies No.25(1971), 75.
- ③ Wells, Ibid.,73-82.
- ④ Wells, Revolutions,151.
- ⑤ Wells, The Population of the British Colonies in America before 1776:A Survey of Census Data(1975),130.
- ⑥ Wells, Revolutions, 151.
- ⑦ Ibid.
- ⑧ Mary Beth Norton, Liberty's Daughters:the Revolutionary Experience of American Women,1750-1800(1980).
- ⑨ Ibid. Chap.2.
- ⑩ Ibid, Part,II.
- ⑪ George E.Howard, A History of Matrimonial Institutions:Chiefly in England and the United States, 3vols(1904).
- ⑫ Cf. Staughton Lynd, “Who Should Rule at Home? Dutchess County, New York in the American Revolution”, William and Mary Quarterly, vol. 18(1961),330-59.
- ⑬ Linda Kerber, Women of the Republic:Intellect and Ideology in Revolutionary America(1980).
- ⑭ U.S. Bureau of the Census, Heads Families at the First Census of the Unites States Taken in the Year 1790-New York(1908),201.
- ⑮ Edmund B.O'Callaghan, Documentary History of the State of New York, vol. 3(1850),946-7.
- ⑯ Wells, “The New York Census of 1731”, New-York Historical Society Quarterly, vol.57(1973),255-9;The U.S. Bureau of the Census, A Century of Population Growth(1909),194-5.
- ⑰ 1698年と1771年との間に、黒人は、全人口比が11%から15%となった－Wells, Population of British Colonies,112.
- ⑱ 例には、次の書物を見よ。Robert A.Gross, The Minutemen and Their World(1976); Benjamin W.Labaree, Patriots and Partisans:The Merchants of Newburyport,1764-1815(1962).

『W.アーヴィングの2つの作品と当世風社会史からみた18世紀末ニューヨークの社会的変化』

- ①⑨ Gross, op. cit., Chap. 7.
- ②⑩ Cf. Mary P.Ryan, *Cradle of the Middle Class: The Family in Oneida County, New York, 1790-1865*(1981); William H.Siles, “Pioneering in the Genesee County: Entrepreneurial Strategy and the Concept of Central Place”, Manfred Jonas and Robert V.Wells eds., *New Opportunities in a New Nation: The Development of New York after the Revolution*(1982),35-68; Alice P.Kenny, *Stubborn for Liberty: the Dutch in New York*(1975),Chap.2.
- ②⑪ Bernard Farber, *Guardians of Virture: Salem Families in 1800*(1972).
- ②⑫ Tuttleton, ed., op. cit., 1058-88.

おわりに

- ① ニューヨーク州のニックネーム。それは、ワシントンが同州を「帝国の中心地」と言及したことに由来したと思われる(*The Encyclopedia Americana, International Edition*(1967),vol.20,199).

—〔終〕—